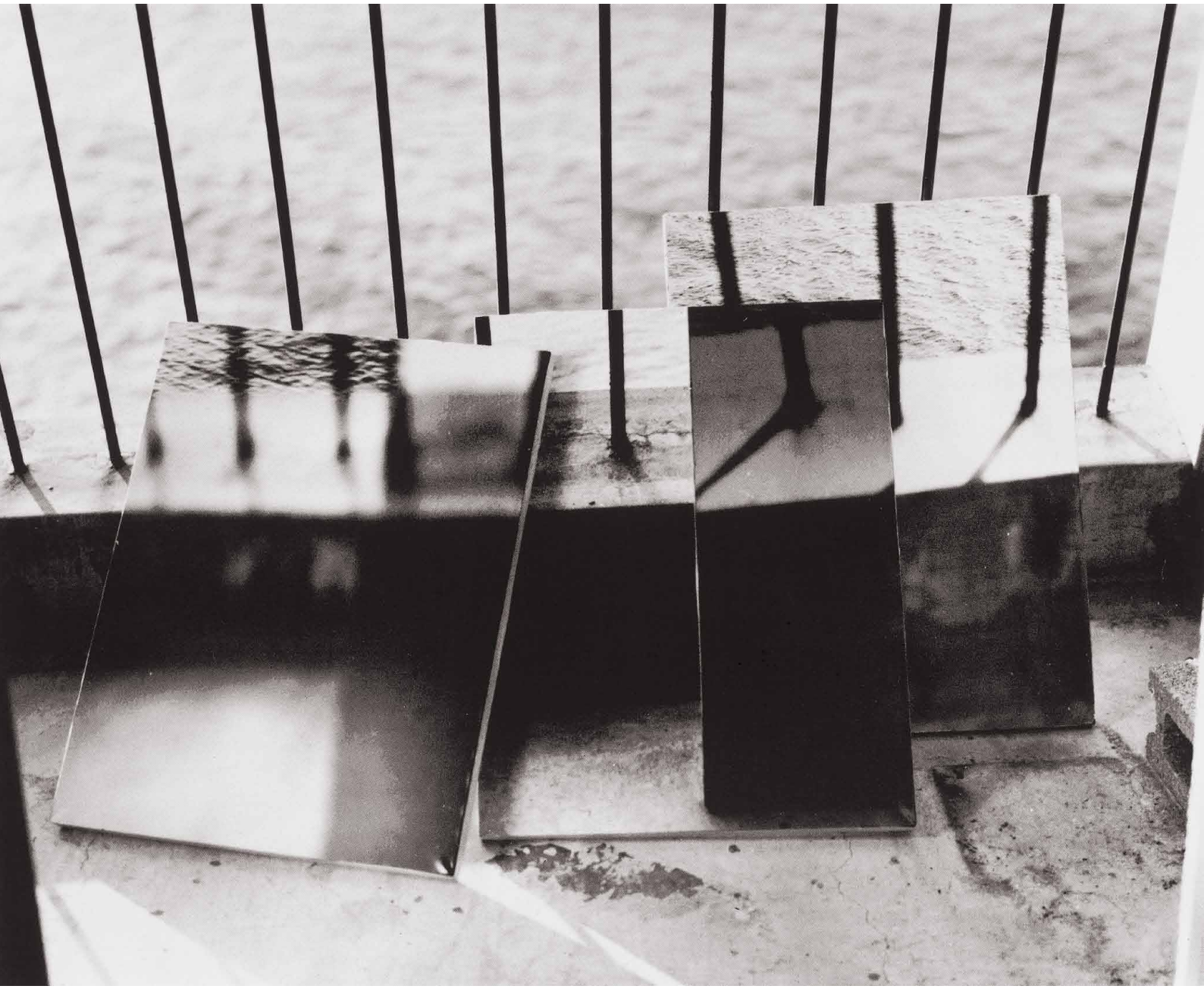
アマリリス
Amaryllis
静岡県立美術館ニュース
THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



セメントの乾いた地面と鉄柵。向こう側には水面が揺れている。どこにでもありそうな、無表情な場所の光景に、作家の行為が加えられることによって、我々は、立ち止まり、風景を「見る」きっかけを与えられる。作者は、あらかじめ同じ場所を撮って原寸大に引き伸ばした写真パネルを、現実の風景に重ねあわせるかのように配置し、再び撮影している。写された場所のイメージが重なり合い、現実と虚像の境界が攪拌されて、意識はおのずと「見ること」へと導かれる。写真と、写真の中の写真。イメージのわずかなズレ、ピントの違い、影の角度により、目に見ることが出来ない、時間の経過が可視化される。作者は、写真という、出来るだけ手わざを感じさせない手段を用いて、風景を媒介に「見ることの構造」を浮き上がらせようとしている。

（上席学芸員　川谷承子）

No.
114
2014年度｜夏｜

美術館学芸部長という存在

―人事交替の春に

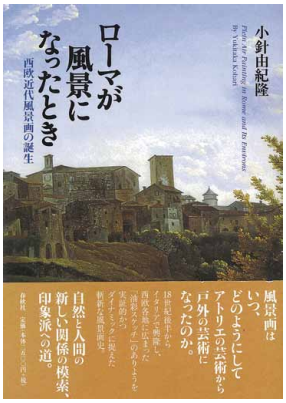
館長　芳賀　徹

小針由紀隆氏は静岡県立美術館の静かなる主（ぬし）であり、その歴史の生き字引であった。

慶応の美学美術史の大学院修士課程を終えると、その年一九八〇年の秋からイタリア政府給費留学生としてフィレンツェ大学に学び、二年後の帰国直後には本美術館建設準備室に学芸員として採用された。つまり一九八二年四月から八六年の当館開館をへて、本年二〇一四年の三月末まで、なんと三十二年の長きにわたって、代々の館長、館員とともに働き、四十代半ばからは学芸課長、学芸部長として相当に心労の多い仕事をこなしてきたのである。当館の活動のいわば内燃機関ともいうべき一貫した動力源であった。

東西風景画の蒐集・調査・展示を主要課題とする当館で、準備室時代からその潤沢な予算を精いっぱいに使って名品を集めることのできた若き日の小針氏は、まことにうらやましい。いまの学芸員たちにはただ羨む以外にないような過去の栄光だ。小針氏はさすがによくそれらの館蔵品を知悉し、それらを活用し、他館とも協力して、主に十七・八世紀のイタリア、フランスの風景画から二十世紀のパリ風景にいたる展覧会を三十余りも企画し、成功させてきた。ロダン館の開設にも大いに活躍した。

さらに小針氏の場合、この学芸員としての活動がいつも着実な研究者としての努力によって裏づけられていたことがめでたい。それは、本館初代館長鈴木敬氏以来のよき館風の実践であった。たとえば氏の長年にわたるクロード・ロランやユベール・ロベール。そして、コロー、コンスタブル、モネに至る風景画家たちへの敬愛の念と周到な研究を一冊にまとめた『ローマが風景になったとき―西欧近代風景画の誕生―』（春秋社、二〇一〇年）を見よ。美術史の大道への広やかな眺望をたえず保ちながら、個々の作家・作品と終始親密につきあってゆく、その叙述は、典雅な行文と相まって、美術史というもののよろこびを私たちに教える。



小針由紀隆『ローマが風景になったとき　西欧近代風景画の誕生』春秋社、2010年

この書物を知った私は、二〇一一年春岡崎市美術博物館で館長（当時、静岡と兼任）として最後の企画展「桃源万歳！」を催したとき、小針氏に図録のためのエッセイを依頼した。「アルカディア考―牧人生活をめぐる文学と絵画」と題して寄せられたその小論文の、期待どおりのみごとさ！短い中に、ヴェルギリウスの『農耕詩』からクロード・ロラン、プッサン、ブーシェに至るアルカディア的「心地よき場所」の表象の歴史が、ちゃんとE・R・クルチウスの論をも引きながら語り尽くされていた。

この秀才紳士は今春、定年に一年を残して、静岡文化芸術大学教授として浜松に移った。美術史家小針氏のさらなる円熟の仕事場となることだろう。秀才去った後の学芸部長職に鶴のごとく舞いおりてきたのが才媛泉万里氏だ。この人もまた、主に日本中世のやまと絵屏風について、詳密な観察と調査にもとづいて絹のごとくこまやかな、氏の一書の題名から借りれば「光をまとう」ような論文を書く。『中世屏風絵研究』という箱入りの大冊も昨秋刊行したばかりである（中央公論美術出版）。泉新学芸部長には、将来ホイジンガの名著『中世の秋』の日本版のような美術史的文化史を書き、そのような趣意の企画展をも構想してもらおう。

右、今春の人事交替の報告に託して、館長としての感謝と期待とを述べた。

泉万里『光をまとう中世絵画―やまと絵屏風の美』角川学芸出版、2007年

「アニマルワールド —美術のなかのどうぶつたち」

7月29日（火）～9月7日（日）

ここに一幅の掛軸があります。作者は円山応挙門下の奇才・長澤蘆雪（一七五四～九九）。描かれているのは竹と、その下で戯れる子犬たち、ただそれだけです。この絵を見た誰もが、ふわふわとした感触が伝わってきそうな愛らしい子犬たちに惹き付けられ、思わず目を細めることでしょう。掛軸を見慣れない子供たちにとってもたいへん親しみやすい絵であることは間違いありません。そしてその筆づかいに目を凝らせば、このあっさりとした画面のなかに、いかに高度に鍛錬された筆墨が凝縮されているかがおのずと伝わってくるはずです。

しかし、ここに描かれているのは本当にそれだけなのでしょうか。蘆雪は、たんに愛くるしい生き物をそれとして描いただけなのでしょうか。もちろんそうであってもいっこうに構わないのですが、すると添えられている竹は、まさに文字通り添え物にすぎないということになるのでしょうか。

その疑問を解くヒントが、この作品をおさめる箱にあります。時代ものの箱の蓋には「一笑図」の文字。「犬」の文字はどこにも見当たりません。主題が「笑」、でも描かれているのは「竹」と「犬」だけ。竹と犬、竹と犬…。そう、実はここには「竹」+「犬」=「笑」という一種の言葉遊びが隠されているのです。そして笑いが福を呼び込むのであれば、これは吉祥画（きつしょうが）、つまり招福のおめでたい絵ということになるわけです。

動物をモチーフとする絵画作品を一堂に集め展示する「アニマルワールド」展は、こんなふうに動物が描かれる背景を考えてみようという展覧会です。動物絵画といっても獣に限りません。鳥や魚はもちろん、虫や想像上の生物まであらゆるいきものが含まれます。誰もが親しみやすく分かりやすい動物絵画、けれどもその裏にある文化的背景を知らないと、実は本当の意味ではなかなか理解できないこともある、という側面もあわせもつのが動物絵画の奥深いところです。

そう聞くと、親しみやすいと思っていた動物絵画が急に縁遠いものに感じられてしまうかもしれません。でも心配は無用。動物が描かれる背景は実にさまざまで、すべての動物絵画になぞなぞのような趣向が備わっているわけではないからです。たとえば、見慣れない珍しい動物を目の前にした時の驚きと好奇心によって、画家が筆を走らせることだってあるのです。なかには、カエルとフグが相撲をとるという不思議な作品も。意味を考えるより先に、ついつい笑いがこみあげてきます。それに、作品を頭でばかり理解しようとすると、絵画鑑賞はとたんにつまらないものになってしまう危険があるので注意が必要です。眼でも楽しみ頭でも楽しむ。これが「アニマルワールド」展を存分に味わうための秘訣です。

江戸時代の作品を中心に、古いところでは鎌倉時代から昭和期の近代絵画まで、そして一部に中国絵画もまじえながら、時代や国境を越えて私たちの心を打つ多様な動物表現を、是非ご家族ご一緒にお楽しみください。

（主任学芸員　福士雄也）

長澤蘆雪《一笑図》江戸時代（18世紀）個人蔵

平成25年度　新収蔵品・寄贈作品の紹介

一九八六年（昭和六一年）の開館以来、「東西の風景画」を中心に収集活動を続けてきたコレクションは、ご寄贈いただいた作品を含め、二五〇〇点余を数えるまでになりました。

平成二五年度は、基金により一件の作品を購入し、一四点の寄贈をいただきました。ここでは、それぞれの作品について、各ジャンル担当の学芸員より、その特徴と見どころをご紹介いたします。

【日本画】

昨年度は、二点の作品をご寄贈いただきました。

平山郁夫《秋天東寺五重塔》は、二〇〇五年（平成十七年）に開催された「平成の洛中洛外　平山郁夫展」（日本橋三越ほか）に初出品されたもので、その後も多くの回顧展に出品されている著名な作品です。黄金色の夕焼け空の下、燃えるような紅葉に囲まれた東寺（教王護国寺）五重塔がシルエット状に浮かび上がります。作者が「自然と歴史の調和」にあると語る東寺の美しさが、見事にあらわされています。

伝池大雅《林屋洞図》は、極端に横長の画面をもつ掛軸で、アーチ状の懸崖の向こうに遠景を望む景観構成が魅力的な作品です。やや形式化した岩皴などから、現時点では池大雅の作とすることは難しいと考えますが、かつて『池大雅作品集』（中央公論美術出版、一九六〇年）に掲載された経歴をもつ点、その資料的価値は決して小さいものではありません。大雅の原本があった可能性も考えられるでしょう。

（主任学芸員　福士雄也）

【日本洋画】

日本洋画では、三件の収蔵がありました。

黒田清輝《富士之図》は神奈川県の逗子方面から富士を望んだ六点組の油彩画。すでに昨年度中に展示してお披露目することができましたが、時間によって変化する光のありようを瑞々しく写しとった佳品として高く評価されています。

小林猶治郎の油彩画群は御遺族様から御寄贈いただきました。小林は静岡・興津の生まれ。独特のこってりした質感を持つ濃厚な絵肌と色彩感覚が魅力です。キャンヴァスを背負って山野を跋渉した自然派画家にふさわしい、なんともいえない俳味もこの人ならではと言うことができましょう。

伝池大雅《林屋洞図》18世紀（江戸時代）

黒田清輝《富士之図》より　1898年（明治31年）

小林猶治郎《雪渓》 1924年（大正13年）

岡鹿之助《献花》も篤志家の方からの御寄贈品です。煉瓦造りの近代建築、雪景色、花の静物といった静謐なモチーフを独自の絵肌で密やかに表現することをもっとも得意とした岡鹿之助。本作もその代表作のひとつであり、岡を振り返る展覧会でしばしば紹介されてきた名品です。

（上席学芸員　村上敬）

【現代】

現代ジャンルでは、二点の作品をご寄贈をいただきました。ダレン・アーモンドは、一九七一年にイングランド北部のウィガンに生まれた、イギリス人作家です。映像・インスタレーション・彫刻・写真などを組み合わせて、個人あるいは歴史上の記憶、時間、連続性をテーマに、鑑賞者を内的な旅へといざなう作品を制作し、高い評価を得ています。本作は、満月の夜の月明かりの下で、一五分以上もの長時間露光を行い自然の風景を撮影した写真作品、「フルムーン」シリーズのうちの二点です。月の光によって、幻想的に浮かび上がる夜の闇の木立が、その場の静寂さや空気感をも包み込むかのように捉えられています。制作する過程で、アーモンドは、日本の比叡山を旅し、そこに暮らす人々と対話をして、彼らの記憶や、物語を手がかりにしながら撮影を行っています。そのようなプロセスを経て写し出される風景は、ノスタルジーを喚起させ、観る者の中に内在している記憶に語りかけてくるかのようです。

（上席学芸員　川谷承子）

ダレン・アーモンド《Civil Dawn@Mt.Hiei.7》2008年
Courtesy the Artist and SCAI THE BATHHOUSE

ダレン・アーモンド《Civil Dawn@Mt.Hiei.8》2008年
Courtesy the Artist and SCAI THE BATHHOUSE

本の窓

『芸術新潮 特別レポート
ルーブル美術館と子供たち』
新潮社　二〇〇九年初版発行

教育普及に携わる者として大変興味深い内容が掲載された二〇〇九年に発行の芸術新潮四月号を紹介します。ルーブル美術館には定期的に開催されているワークショップ「子どものためのアトリエ」というものがありますが、ルーブルではこうしたワークショップは大人から子どもまで約六〇のプログラムがあるそうです。うち、三〇以上が子ども向けであり、その他に一六〇以上の子ども向けの見学ツアーもあるようです。読んでいてさらに驚いたのは、フランスでは二〇〇八年より芸術教育に関して大胆な改革が成され、小中高等学校の授業に「諸芸術の歴史」を組み込むことが義務化されたことです。どういうことかというと、既存の時間割にある美術や歴史以外に国語や数学、もちろん体育まで含めたすべての教科の中で「諸芸術の歴史」を教えるのだそうです。すべての教科の中で時代、文明、分野の作品と接する機会を与えること、普遍的な価値を持つ教養を身につけるようにすることが学習の目的、とありますが、フランスの途方もない企てには只々驚愕するばかりです。

（主査　神谷洋介）

館蔵品紹介

《都鄙（とひ）図屏風》をめぐって

学芸員　浦澤倫太郎

《都鄙図屏風》（図一）は当館準備室時代の昭和五九（一九八四）年に館蔵品となった。開館以来、折々に展示されてきたが、詳しい紹介の機会はあまり無かった。そこで今回は改めてこの作品について考えてみたい。

八曲一隻、紙本着色で、金銀の砂子により装飾される。向かって右手の市街地から水辺、邸宅群、郊外と四つのエリアに明確に分けられる。俯瞰される市街地から洛中洛外図などが想起される一方、特定の名所や建物は描かれず、架空の景観を表すようだ。書き込み、落款などはない。

図一　《都鄙図屏風》紙本着色　八曲一隻屏風　121.5cm×375.4.8cm

見所は、何と言っても多種多様な人物像である。特に商人、農家、工匠など種々の職人の姿は、見飽きることがない。まずはエリアごとにその人物達を概観してみよう。

第一～三扇に町家の並ぶ市街地が展開する。右上には歌舞伎の殷賑が描かれ、舞台中央の役者は、烏帽子や扇、後ろにちらりと覗く御幣、振袖を片肌脱ぎにする扮装から業平踊（大小の舞）を舞う若衆とわかる（図二）。『静岡県立美術館収蔵品総目録』（平成八年）では製作年が「寛永―承応頃」とされるが、これは若衆歌舞伎が承応元（一六五二）年に禁止されたことを踏まえたためであろう。その下、第一扇半ばから、八百屋や豆腐屋、煙草屋、指物師などが、簡略に表された町家に店を構え、第三扇まで辿ると、草鞋師や鍛冶屋がある。下辺に目を転じると医師、祈祷師、刀剣の目利き、紙漉、石工などが並ぶ。また路上では鷹匠や柴売り、竹売や馬方達が行き交い、床屋、鉦たたきなども広場に確認できる。

図二　業平踊を舞う若衆

第三～六扇下部は水辺の景観で、各モチーフが散在する。船着場周辺に荷運びや材木屋、少し離れて相撲の賑わいも見え、川面には筏や鵜飼の舟が行く。また船着場の対岸では、男二人が向かい合い今にも刀を抜かんとするのを周りが必死で止めようとしている。このほか下辺に瓦焼のほか、傍に松の生える苫屋に薪をくべる塩焼がいる。その左の小屋には釣り人もおり、海は見えないがこの辺りはどうやら海浜らしい。

第四～六扇上部には二件の邸宅が並ぶ。右の邸宅の庭先では馬の世話をする男達、門の前でさっそうと駆け抜ける馬乗を人々が見物している。左の邸宅では、室内に連歌会らしき催事や琵琶法師が見える。邸宅の周囲では放下と観衆、射的など遊楽が表される。

第五～八扇に大名行列が横断し、水辺と郊外を繋ぐ。馬を先頭に筒持、弓持、傘持、槍持、徒、そして駕篭が続く。それを画面下部の田圃から稲刈り中の男たちが眺め、また上部の山には樵夫や猟師も見える。

全体をざっと眺めたが、そもそも《都鄙図屏風》という名称は、単にこうした「都鄙」の光景と人物を描くというだけでなく、住吉派二代目、住吉具慶（寛永八（一六三一）年～宝永二（一七〇五）年）による《都鄙図巻》（東京国立博物館蔵、登録名称は《洛中洛外図巻》）などと関係するとされ、収蔵の際に付されたようだ。[1]《都鄙図巻》は、市街地から農村へと変化して行く光景を舞台に、様々な風俗を四季の景物を交えて描く。東博本に落款は無いが、興福院やチェスター・ビーティ図書館が所蔵する《都鄙図巻》は落款や画風から具慶晩年の元禄以降の制作とされる。

『静岡県立美術館蔵品目録』（昭和六一年）では《都鄙図屏風》は面貌表現に具慶と近似したものが認められるが、樹木などの表現が稚拙とされるため、具慶の若描あるいはその追倣者の制作の可能性が指摘されている。確かに人物像の目鼻立ちや幾分ずんぐりとした体型に具慶風が看取され、また

先述の若衆歌舞伎によって承応を下限とするならば若描という推測もできるかもしれない。ただ比較すべき同時期の具慶の作例など、その判断を下すための材料が揃わない状況にある。風俗が過去に遡って描かれる可能性にも留意すべきだ。

また「都鄙図」という名称、及び都市と郊外に種々の風俗を描く点は《都鄙図巻》と共通するが、その表現内容の相違は小さくないと思われる。東博本《都鄙図巻》などは、職人、遊楽のみならず、年中行事や濃密で変化に富んだ建築、細やかな四季の景物も合せて、より総体的な風俗描写を指向する。対して《都鄙図屏風》は、幾分単調な家並に代表されるように景観構成は比較的単純でそこに各人物像が羅列的に配置されており、いかに多種の人物像を表すかに主眼が置かれているように見える。

さて《都鄙図屏風》の人物像は、この作品に対する別の視点を提供しうる。すなわち図様のいくつかは、中世に成立した職人歌合から取られており、職人絵の系譜にも連なると考えられるのだ。

例えば第七扇の上部、壁の後ろから姿を覗かせて作業する二人の男（図三）だが、手前の火を吐く器物は坩堝、男達は踏鞴を踏んでいるようで鋳物師と判断されるが、この図様は鎌倉時代に成立した『東北院職人歌合　五番本』のうち《高松宮家本　東北院職人歌合》の「鋳物師」（図四）に近似する。烏帽子を被らず頬被りをする、両脇に人物が加えられるなどの相違はあるが、基本的な形姿と建物は高松宮家本を踏襲している。

図三　鋳物師

図四　《高松宮家本東北院職人歌合》より鋳物師　国立歴史民俗博物館蔵

第一扇下部の祈祷師も、その姿はもとより机上の御幣など、道具の形態や配置についても、同じく高松宮家本の「陰陽師」を踏まえた表現だと認められる。他に箱型の鞴の前で鉄を鍛える鍛冶師は『東北院職人歌合　十二番本』の「鍛冶師」、地べたに座り込んで苦屋の釜に薪をくべる塩焼も十二番本の「海人」の図様を、それぞれ参照したものと思われる。

職人に仮託した和歌とその姿を表す職人歌合は先の五番本を含め、中世に五種が成立し、中世～近世の風俗画に大きな影響を与えた。近世では例えば版本化もされた『七十一番本職人歌合』の辞句に拠る菱川師宣《和国諸職つくし》はその挿絵にも同歌合からの一部引用が見られる。また十二番本についても、そのパロディと評しうる岩佐派《職人尽図巻》（出光美術館蔵）、同歌合絵の諸写本および高松宮家本の図様を部分的に用いた狩野宗信《職人尽屏風》[二]などが挙げられる。《都鄙図屏風》も旧来の職人歌合を意識した作例の一つといえよう。

一方で、近世になって成立した図様や、職人歌合になかった職業も確認でき、作者が新たな風俗にも関心を持っていたことがうかがえる。

椅子に腰掛け足を組み、帳簿をめくる材木屋の姿（図五）は、約五百の職業を図説する蒔絵師源三郎画『人倫訓蒙図彙』（元禄三（一六九〇）年刊行）所収の図（図六）に近い。背後の木材の積み方も似ている。他に錐で木材に穴を穿とうとする指物師にも、『人倫訓蒙図彙』との共通性が認められる。両者の関係については更なる検証が必要だが、《都鄙図屏風》の成立を考える上でも重要な点だと思われる。

さて第二扇半ばに見える一際印象的な耳垢取（図七）は、近世になって登場した職業である。店舗内で髪を丸く結った男が、客の耳を掻いている。なかなか気持ちがよさそうだ。『京羽二重』（貞享二（一六八五）年刊）によれば京都に「耳垢取　唐人　越九兵衛」なる人物がいたという。実際に「唐人」であったかはともかく、ここに見る姿は、そうした伝承を反映しているようだ。「唐人」風の耳垢取は前掲の狩野宗信《職人尽屏風》や海北友雪《職人絵尽》[三]、また山東京伝『骨董集』にも確認できるが、いずれも立ち姿で表される。また『骨董集』はこれを享保頃までの風俗としている。

このように《都鄙図屏風》の職人が、新旧の職人絵の図様と共通する事実は、様々な職への強い関心がその制作の発端であったことを示している。そして彼ら職人の活きる場として「都鄙」が舞台として選ばれたのではないだろうか。江戸時代における職人絵の展開を考える上でまことに興味深い作品である。

図五　材木屋

図六　『人倫訓蒙図彙』より　材木や　国立国会図書館蔵

図七　耳垢取り

一　当館収蔵になる以前では、『古今屏風特選図録』（思文閣、昭和五六年）には《時代風俗図屏風》、『日本庶民生活史料集成』第三〇巻（三一書房、昭和五七年）に付属の「編集のしおり」には《諸職風俗図屏風》として部分図が紹介されている。

二　町田和也「宗信筆「職人盡屏風」」（『國華』第一一二六號）

三　林美一編『海北友雪　職人絵尽』協和企画　昭和五八年

絵の扉は静かに開く

学芸部長　泉　万里

この四月に学芸部長として着任いたしました泉万里と申します。どうぞ、よろしくお願いします。私はこれまで、神戸や大阪の大学で教員として働いてまいりましたが、美術館勤務の経験はなく、いまは、文字通りの「新入生」として、緊張の連続の毎日をすごしています。

専門は、日本の中世から近世初期の絵画ですが、とりわけ屏風絵が大好きです。目の前に置かれた屏風を見ていると、絵の世界の扉が静かに開いて、そのなかに迷い込むような錯覚を覚えることがあります。たとえば、平安時代の屏風に、小さく描かれた貴族の屋敷を凝視しているうちに、その屋敷に集う女房たちの緋色の袴の衣擦れの音を耳にしたような気がしたり、江戸時代の風俗図屏風に描かれた、武家屋敷の風呂場で朋輩とくつろぐ湯上がり美人ならぬ「湯上がり美少年」を包む、むっとする生暖かい湯気を感じたりするのです。ただの思い込みにすぎませんが、そのようにして、絵のなかに生きる人々と、時間と空間を一瞬にせよ共有できたときに、はじめて、私はこの絵を見た、といえるようになります。

もちろん、どの絵でも、すぐに扉が開くわけではありません。それでも根気よく、繰り返し絵を見ていると、ふと、絵の扉は開いているものです。せっかく扉が開いても、気づかずに通り過ぎてしまうことのほうが多いのかもしれません。

毎日プロムナードの彫刻群を通り抜けて通勤していますが、緑濃い自然の一部と化したような彫刻の落ち着いたたたずまいに、この美術館の歴史を実感します。今後も、この美術館が、多くの方々と、絵画をはじめとするさまざまな造形との出会いの場であり続けるように、美術館のスタッフとともに努力してまいります。

「武家邸内図屏風」萬徳寺蔵　右隻部分

利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)
夜間開館：8月2日～9月6日の間の土曜日（「アニマルワールド」展開催中）
　　10:00～20:00（入室は19:30まで）
休 館 日：毎週月曜日（月曜祝日の場合は開館、翌火曜日休館）

アクセス

◎ＪＲ「草薙駅」から静鉄バス「県立美術館行き」で約６分
◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約３分
◎東名高速道路　静岡I.C、清水I.Cから約25分
◎新東名高速道路　新静岡I.Cから約25分

テレフォン・サービス：054－262－3737
ウェブサイト：http://www.spmoa.shizuoka.shizuoka.jp

無料託児サービス
毎週日曜日および祝日10:30～15:30
対象　6ヶ月～小学校就学前

※イベント等は都合により変更になる場合があります。
※詳細は美術館学芸課までお問い合わせください。
（Tel：054－263－5857）

風景とロダンの
静岡県立美術館
〒422－8002　静岡市駿河区谷田53－2
総務課／Tel 054－263－5755　Fax 054－263－5767
学芸課／Tel 054－263－5857　Fax 054－263－5742

表紙の作品
斎藤　智（1936－2013）
《Untitled C》1976年
紙、シルクスクリーン
60.8×74.3㎝
＊名品コーナーに展示しております。
（～7/21）

2013年度の受賞

美術館連絡協議会　奨励賞「夏目漱石の美術世界」展
静岡県立美術館、広島県立美術館、東京藝術大学大学美術館

美術館連絡協議会　優秀カタログ賞「石田徹也」展
静岡県立美術館、足利市立美術館、平塚市立美術館、砺波市美術館

第1回ジャポニズム学会奨励賞
三谷理華　論文「ラファエル･コランの極東美術コレクション―新出旧蔵品について」
『静岡県立美術館　紀要』第28号　平成24年度

また、昨年度、当館で開催した以下の展覧会が、年末に各新聞社で発表される、「美術評論家が選ぶ2013年展覧会ベスト3」に選出されました。

「夏目漱石の美術世界」
北澤憲昭氏、山下裕二氏（朝日新聞）、高階秀爾氏（毎日新聞）
「世界遺産登録記念 富士山の絵画」
高階秀爾氏（朝日新聞）

友の会のご案内　入会は常時受け付けています。会員特典など詳細は、友の会事務局(Tel.054-264-0897)にお問い合わせください。

静岡県立美術館ニュース『アマリリス』No.114　編集発行：静岡県立美術館　2014年7月1日　印刷：文光堂印刷株式会社